

2021年4月4日 説教「復活の喜び」

マタイの福音書 28章 1～10節

受難週を経て、復活日に至りました。今朝は復活の記事から学びます。



1. 御使いの到来 (1～3節)

- ①二人のマリア (1) **「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリアとほかのマリアが墓を見に来た。」** 主イエスが十字架につかれたのは金曜日。葬られて三日目。ここには「安息日が終わって」とありますが、当時の安息日である土曜日が過ぎたのです。そして、週の初めの日、日曜日の朝早くのことです。二人の女性がイエスの葬られた墓にやってきました。一人はキリストによって七つの悪霊を追放してもらい、救われたマグダラのマリア。もう一人もマリアとう名ですが、12弟子のひとりアルパヨの子ヤコブの母だと思われれます。マルコの福音書ではこの二人にサロメが加わっていたと記しています (マルコ 16:1)。
- ②大きな地震 (2) **「すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。」** 彼らが墓まで来ると、大きな地震が起きました。聖霊降臨の時にも、激しい風が吹いてくるような響きがありましたが (使徒 2:2)、主の使いが天から降りてこられたことによって、地は揺れ動いたのです。主の使いは、墓の入口を塞いでいる大きな石をわきへころがし、その上に坐りました。
- ③いなずまのように (3) **「その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。」** 主の使いは、その姿全体が稲妻のように輝いていたというのですから、強烈なライトに照らし出されたようであったでしょう。パウロがダマスコ途上で主イエスとお会いしたときも、同じような状況でした。主の使いが身につけていたのは白い衣でした。それも雪のような白さでした。周りとははっきりと区別されて、浮かび上がる白さだったのです。

2. よみがえりを伝える御使い (4～7節)

- ①番兵たち (4) **「番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。」** ローマ帝国の地方総督であるピラトの名の下に行われた十字架刑でしたから、その後の墓の管理も続いていたと思われれます。彼らは現れた御使いの姿を見て、腰を抜かさなばかりでした。なにしろ、地震が起きて、まばゆいばかりの光に包まれた存在がそこに現れたのです。「恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった」としても、おかしくはありません。なにしろ御使いは天的存在なのですから。
- ②恐れずに (5) **「すると、御使いは女たちに言った。『恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。』** 御使いが二人のマリアに告げたことは、まずは「恐

れてはならない」でした。次に御使いは、マリヤ達が十字架につけられ、墓に安置されているはずのイエスの遺骸を認めようとしているのを見て、「あなたがたは十字架につけられたイエスを捜しているのでしょうか？」と言いました。

- ③よみがえられた (6~7)「**ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらん下さい。ですから、急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせ下さい。イエスが死人のなかからよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。**」でもここにはおられませんよ。そして、安置場所にはイエスの遺骸がないのを確かめさせてから、キリストは死人のなかからよみがえられたという使信を伝えます。その上で、女たちには、その使信を弟子達に知らせること、弟子達にはイエスはガリラヤに先に行っているの、そこに行って復活の主と会いなさいと伝えたのです。

3. 復活の主の顕現 (8~10 節)

- ①大喜びで (8)「**そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。**」ここでマリヤたちには、主が復活されたことを確信したと言って良いでしょう。つまり、御使いから「よみがえられたのです。」というメッセージを真正面から受け入れられたのです。ですから、恐ろしさもありましたが、二人は喜びに満たされて、墓の場所を後にして、弟子達にこのことを知らせることにしたのです。御使いから言われたことを伝えることは使命であるように思えたのでしょうか。
- ②復活の主が (9)「**すると、イエスが彼女たちに出会って、『おはよう』と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。**」ところが、彼らが弟子達の所に向かってから程なく、これもまた驚くべきことが起きたのです。復活の主イエスが彼女たちの前に、現れたのです。主は言われます。「おはよう」。シャロームという言葉です。平和という意味ですが、挨拶に用いられます。朝であれ、昼であれ、夜であれ、「シャローム！」は、挨拶に使われるのです。女たちは、主を認めると近寄って、主の御足を抱いて、その身体を確かめたうえで、主イエスを礼拝したのです。
- ③兄弟達への言葉 (10)「**すると、イエスは言われた。『恐れてはいけません。わたしの兄弟たちにガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。』**」復活の主は言われます。「恐れてはいけません」。御使いも伝えた言葉ですが、人間がいか「恐れ」を持ちやすいかを示しています。ここでは、起きている出来事が「主の復活」であり、常識をはるかに越えたことだからです。死人であったはずの

主が、現実的に目の前にあるという事実を真実であることを受け入れることができれば、「恐れ」は消えるのです。キリストは復活信仰を女たちに教えているのです。目の前にいる方が復活の主であることを受け入れることができなければ、弟子達にガリラヤの地に行き、そこで復活の主に会えるというメッセージを伝えることもできないからです。主が復活されたという使信を彼らは受け入れました。

《結論》

「復活」という言葉は、一般的にはどのような意味で使うのでしょうか。たとえば、「元大関照ノ富士が序二段まで陥落した後、数年で大関にまで復活した」と言った意味合いで使うのではないのでしょうか。つまり、以前の力が回復するとか、以前の立場などに、多くの人々の予想に反して返り咲いたりすると、「復活」という言葉を使います。

しかし、聖書が私たちに示している「復活」はそのような意味ではなく、まさに「死から生への復活」を語り告げているのです。十字架上で私たちのため

に、イエス・キリストは死に、葬られ、三日目によみがえられ、人々の前にその姿

を示された。ここに出てくるマリヤ達ばかりでなく、弟子達に現れ、さらに 500

人以上の兄弟たちに現れたパウロは伝えていきます (I コリント 15 章)。

桜が散ると、日本では人生のはかなさや無常を覚えるのですが、実をいえ

ば、それはさまざまな命がめざめる春の始まりです。「球根の中には」でも歌っ

てきたように、「いのちのはじめ」なのです。

復活を歴史上の出来事と信じる信仰が、キリスト教信仰の土台です。クリス

チャンは、復活は物語ではなく、事実だと受け入れている人々なのです。

ここで注目したいことは、番兵達はただ恐れています。二人のマリヤは恐

ろしくはありましたが、主の復活を信じ、大喜びで弟子達の所に伝えるべく走

り出したということです。「大喜びで」というところに、彼らの信仰が現れていま

す。そんな二人に、復活の主が現れて「おはよう」とあいさつをしてくださいました。そして、「恐れずに、弟子達に伝えなさい。」と励ましてくださいました。

今年の私たちの教会の年間の御言葉は「いつも喜んでいなさい」(イテサロニケ 5:16) でしたが、「喜び」の揺るがない根拠は「復活」にあるのです。

そこに基づくからこそ、「いつも喜ぶ」ことができるのです。彼らは主の十字架

の死という絶望から、復活による希望へと移されていったのです。復活信仰は、

人によって左右されるものではありません。キリストがよみがえってくださった

という事実を受け入れ、信じるのです。復活信仰に基づく喜びも、誰かがそこ

にいたりとか、何らかの条件が整っているからといったことに基づくのではない

のです。ただ、復活の主がともにいてくださるという信仰に基づくのです。

今朝、私たちの教会では洗礼式が行われますが、土屋光代姉と雅史兄に

も十字架と復活の福音を受け入れ、キリストの復活を信じる信仰を確かめた

上で、この日を迎えています。既に、キリストを信じる者たちも、改めていかな

る状況のなかにあっても、喜びをもたらしてくれるのがこの復活信仰であるこ

とを確認して、信仰生活、教会生活を続けていこうではありませんか。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネの福音書 11 章 25 節)